「公益社団法人日本オリエンテーリング協会中長期事業方針（2020）

2020 年以降の行動目標」に対する自己評価　2023 年 3 月

1. IOF(International Orienteering Federation)の事業への協力・参画
   WOD(World Orienteering Day)事業や各種講習会など（毎年継続）
   ・WOD と関連したイベントは継続的に開催された。（評価レベル：3）

2. 国際大会の招致
   世界・地区選手権大会開催（隔年）、WRE(World Ranking Event)の毎年開催
   ・デフリンピック 2025 の正式種目となった。（評価レベル：4）
   ・スキーO 世界選手権 2026 を招致することとした。（評価レベル：4）
   ・WRE として、毎年、全日本ミドル・ロング大会が対象となっている。他に、WMOC プレ大会や三河 OLC 大会なども対象となった。（評価レベル：3）

3. IOF への役員・委員派遣
   委員の派遣（継続）、理事への立候補（次期～次々期改選）
   ・IOF 理事候補を推薦したが落選した。（評価レベル：2）
   ・IOF 委員には日本人はいない（評価レベル：1）

4. 世界選手権などへの選手派遣（毎年継続）
   ・世界選手権、ジュニア世界選手権、スキーO 世界選手権、MTBO 世界選手権、トレイル O 世界選手権に継続的に選手を派遣した。（評価レベル：3）

5. 世界に通用する選手の発掘、戦略的育成
   コーチング制度の確立（2 年以内）、選手育成のための系統的指導方法の確立（5 年）
   ・JSPO のコーチ制度に適合するコーチ資格制度を確立し、移行講習を行った。（評価レベル：4）
   ・コーチ志望者が多いとは言えず、指導方法のノウハウも継続的に改善の必要性がある。（評価レベル：3）

6. ジュニア世代の育成
ジュニア世代対象イベントの充実（3 年以内）
・いわゆるインターハイを JOA のかかわる事業とすることを試みたが、継続ができなかった。（評価レベル：2）
・ジュニア選手が、世界選手権などでより上位に入ることが増えてきた。（評価レベル：4）

7. 選手・役員のマナー・コンプライアンス教育、アンチドーピング教育（継続）
・役員のコンプライアンス研修会を年 1 回継続して行った。（評価レベル：3）
・選手やイベントアドバイザーに向けてのアンチドーピング教育を継続的に行った。（評価レベル：4）
・日本代表選手へのインテグリティ教育を行う予定とした。（評価レベル：3）

8. 指導者・イベントアドバイザーの充実（2 年以内）
・イベントディレクター制度を設け、運用を開始した。（評価レベル：4）
・イベントアドバイザーの新規養成講習会を隔年開催に増やし、研修会も毎年開催した。（評価レベル：4）

9. 主催大会（全日本選手権）の安定的開催、参加者増（目標各大会 1,000 人超）、質の維持、公認大会の増加（2 年以内）
・新型コロナ感染症の影響で、開催できなかったことがあったが、ロング、ミドル、スプリント、リレー、スキーO、の全日本選手権を継続的に開催した。（評価レベル：3）
・2022 年のミドル、ロングでは 1000 人超の参加者があった。（評価レベル：5）
・公認大会の数は減少傾向にある。（評価レベル：2）

10. 競技規則やガイドライン等の規程類の適切な管理（2 年以内に見直し、以後継続）
・IOF ルールに準拠するように、競技規則・ガイドラインの改訂、地図規程の改訂などを行った。（評価レベル：5）

11. 地方活性化支援、地域クラブ活性化支援

支援モデルの作成（3 年以内）、各種支援方法の模索・実践（継続）
・九州地区を中心に調査を開始した。（評価レベル：2）
・具体的な案について検討を行った。（評価レベル：2）

12. 広報の強化
各種媒体による広報システムの見直し・構築（2 年以内、以後継続）
・ホームページの維持と改善を行った。（評価レベル：3）
・広報に SNS や You Tube なども利用した。（評価レベル：3）

13. 楽しさのアピール、充実感の創出
ありたい大会モデルの呈示（3 年）
・全日本ロング、ミドル、スプリントでかなり達成された。
（評価レベル：4）

14. 大会運営サポート体制・大会運営技術の普及
大会における運営モデルの呈示、技術講習会など（3 年）
・全日本は一つのモデルとなったと言えるが、小規模大会、地方大会への支援を検討する必要がある。（評価レベル：3）
・運営技術などに関する講習会などは適宜行われた。
（評価レベル：3）

15. JOC 承認団体から準加盟団体への昇格（5 年）
・活動を開始しつつある。
（評価レベル：2）

16. アウトドアスポーツ界、陸上競技界との協働
協働イベント年間 5〜10 回（3 年）
・OMM やロゲイニングのイベントが継続的に開催された。（評価レベル：3）
・陸上競技関係との協働はほぼ出来なかった。（評価レベル：1）

17. 大学スポーツへの採用
UNIVAS 事業への協力（継続）、学会等の学術団体との交流（継続）
・世界学生選手権大会（フット O）、ユニバーシアード（スキーO）に参加した。（評価レベル：3）
・学術的な交流はほとんど行われなかった。（評価レベル：1）

18. 高校の部活動との協働による登山界への認知
高校体育連盟の事業への協力（継続）と参入（5 年）
・高校生の登山競技には協力を行った。（評価レベル：3）
・高体連自体への参画のめどはない。（評価レベル：1）

19. 教育施設（小中学校、野外活動施設）に向けてのアプローチ
野外活動施設・学校の地図作製・教育事業への協力（継続）
・鹿児島の全日本リレーを皮切りに、野外活動施設への調査などを九州地区で行った。（評価レベル：2）
・学校での導入は個人ボランティアレベルでしか出来ていない。
（評価レベル：2）

20. パーマネントコース（ＰＣ）の活用
整備体制・システムの見直し（3 年～継続）、広報体制の検討（継続）
・ネットプリントの導入は徐々に拡大しつつある。
・管理は各県協会任せで、不十分なところもある。
・積極的広報は出来ていない。
（評価レベル：2）

21. 地域への貢献：スポーツツーリズムによる地域活性化
地方行政事業への協力・参画（継続）
・各県協会を中心に協力を行っている。大会主催者も地元への協力を意識していることも多い。（評価レベル：3）
・ねんりんピックなどは継続出来てはいるが、大規模イベントへの参画が活性化しているとは言い難い。
（評価レベル：2）

22. 各種技術（読図、ナビゲーション、大会運営、地図作成）の社会還元
講習会開催・情報発信（継続）
・各種の講習会を、主としてオンラインで開催した。（評価レベル：4）

23. 適切な役員選任、組織運営の見直し
役員選任方法の改訂（2 年）、外部役員招聘（4 年）、委員会等内部組織構造の見直し（継続）
・役員選任規程の改定を行い、実行に移した。（評価レベル：5）

・外部役員招聘はわずかであった。（評価レベル：2）
・委員会組織構造を一部改め、委員の交代、新規採用を行った。（評価レベル：3）

24. コンプライアンス、リスクマネジメント
規定類の整備（2 年）、情報収集体制の確立（3 年）
・倫理規程、利益相反規程、選手選考規程、危機管理マニュアル、安全ガイド等の整備を行った。（評価レベル：4）
・新型コロナ対応ガイドラインを策定した。（評価レベル：4）
・突発的事例（競技会での死亡事例、代表選手集団感染）に対して可能な限りの対処を行った。（評価レベル：3）

25. 事務局の強化
事務局員の増加と業務分担の見直し（3 年で人数倍増）
・増員を行ったが、業務量も増加しており不十分である。（評価レベル：2）

26. 財政健全化
収入財源の確保・見直し（継続）
・財務分析が一部出来てきた。（評価レベル：3）
・収入財源は寄付に頼っている現状で、臨時のもの以外の収入はあまり増加しなかった。事業による収入は増加傾向にはない。（評価レベル：2）

27. ボランティアとエキスパートの協働体制の構築
協働モデルの呈示（3～5 年）
・主催大会における契約の透明性の確保、利益相反管理について適正な対応ができるようになってきた。（評価レベル：4）

28. 将来構想委員会の構築
メンバーの選任（2 年）、継続的議論
・設立を検討したが、時期尚早ということで、引き続き検討課題とする。（評価レベル：2）

評価レベル
５：十分な成果を得た。
４：かなりの成果を得たが継続もしくは改善が必要。

３：ある程度の成果はみられたが継続もしくは改善が必要。部分的には成果があっても、対処できていないものがある。継続はしているが改善は見られない。
２：ほとんど成果が得られていない。改善、対応策が必要。
１：全く進捗がみられない。または悪化した。